

裏方役をお引受けして

勢 め 信 義

＜編集者はあくまで裏方役にて、舞台の上には姿を見せないこと＞をモットーに、今日まで約40年間を医学関係の編集にいそしんでまいりました。私の編集者生活に終止符を打つべき契機に入りましたので、塩沢正俊先生からのお誘いもあり、早田義博会長からの要請をいただきましたことに甘えさせていただき、日本胸部外科学会の創立前後の裏話の一端をご披露いたしたく筆をとりました。

「大河は一朝にしてならず、その源泉に遡れば一滴の岩清水から」といいますと、何か諷めきますが、日本胸部外科学会の創立からその以前をたどると、そのようなことが如実にびったり当てはまります。一滴一滴の岩清水はあちらからも、こちらからも滴り落ちて、それがだんだんに集結して小さい流れを形成し、そのいくつかの同様の流れが合流しつつ学会が誕生し、今日の大河をきたし得たといえましょう。

東に「結核外科談話会」の声が興り、西に「結核集談会」の声があがり、その他にもいくつかの集会が、それぞれ合流する形となって「第1回胸部外科研究会」（東京）が産声も高々と昭和23年11月3日に誕生し、第2回（京都）にはその頭に「日本」という冠がつき、第3回（千葉）において初めて「日本胸部外科学会」となりました。

因みに結核外科談話会は戦時中数回ひらかれ、厚生省の肝入れもあって肺結核外科を中心に、戦後は結核全体にひろげられ「結核談話会」となり、会員約300名にて昭和22年1月から再興されておりました。

一方、結核集談会は昭和23年2月に発足し、毎回盛会をきわめておりました。

また別に「胸部外科談話会」が昭和23年7月に佐藤清一郎先生の講演を中心として開かれました。この講演をご依頼に神奈川県大磯町の佐藤邸にお伺いした折、先生から大正4年の朝日新聞の切抜きを見せていただき、そこには先生の肺結核手術の1例が大々的に報じられておりました。大正4年といえば遙か昔のことなので一驚しました。その上、講演の件はご承諾が得られず、すごすご引きさがってきましたが、旬日をおかず再びご依頼に参上いたしますと、今度は快くお引受けくだされ、私もほっといたしました。

それが第1回胸部外科談話会にて、会場は日本医師会館の講堂をお借りして開始いたしました。広くお知らせもできなかったにもかかわらず、活発な意見と多数の方々が集まれ、なかなかの盛会でありました。当時、いかに多くの人々がそうした集会を熱望されていたかが裏書きされます。

その頃「胸部外科」の創刊について京都に青柳安誠先生をお訪ねしてご賛同を得たのですが、その時の先生のお喜びは大変なもので、その夜、一席をもうけられ歓待を受けましたことは恐懼の至りでした。前記の結核集談会の抄録は「胸部外科」創刊号から掲載され、以来ずっと同会の抄録は同誌に掲載するお約束をいただきましたが、この会は全結核に渡りますので、主催者が必ずしも外科の方とは限らず掲載もれもあります。その後、この会は二分され、一方が日本胸部外科学会近畿支部となって続いております。

私どもが「胸部外科」（南江堂刊）を創刊いたしましたのは、昭和23年9月にて、これは胸部外科学会の創立を促進させるための一助ともなればという意味を、初めからもっておりましたし、胸部外科学会が創立されてから第5回の総会のひらかれます間は、その会計と事務的処理とを私がお

預りするはめになってしまいました。

学会の事務所はどこにするかということで、あれこれ話がありましたことも「胸部外科」の編集会議の中で行われ、その結果、藤田真之助先生のおられる東京通信病院がよいということになりました。通信関係なら往復の郵税も「通信事務」にて無料になろうという妙策だったのですが、一度ぐらい何かの案内がそれによって出されたようですが、それはすぐ駄目だということがはっきりして、とりやめになりました。それなら東京大学が一番似つかわしい、ということで、事務所は第二外科教室におき、受信箱は第一外科教室の婦長室の前にて、日本外科学会の受信箱と並んで大きな箱が据えられ、そこに通信いっさいが集められ、その処理は私の役となり、毎日その通信をとりに通いました。

それは第5回総会の武藤完雄会長（東北大学）の時までつづき、その折、学会の事務を専属にするものをおきたいという希望がでて、私から日本外科学会事務所の河合・速見両氏にお話をし、外科学会と併行に処理していただくことに承諾してもらい、事務いっさいをお渡しいたしました。

したがって事務取扱いは第1回から第5回まで私がお預りして、第5回の途上から日本外科学会事務所にお渡しした次第です。

なお、この時点まで「胸部外科」は準学会誌として歩んできましたので、学会の記事はすべて「胸部外科」誌上に発表されておりました。この機から学会誌が学会から刊行されることになり、学会の記事はすべて学会誌に移りました。

「胸部外科」の一つの使命は達せられましたので、雑誌ぐるみ学会に移行する案も出ましたが、「胸部外科」には「胸部外科」としての使命があり、学会とは別に一般胸部外科関係者への啓蒙運動に大きな役割をもつことから、その意味にてぜひ続行してほしいという声が多く、これは簡単裡に決つて、学会誌は昭和28年より刊行され、昭和52年にて25巻になりますが、「胸部外科」は創刊30周年を迎えることになりました。したがって学会の回数と同様になります。

第5回の総会の折、武藤完雄会長からご招待を得て、それまでの労をねぎらう感謝状と金一封を頂戴し、その夜の宴席には上座に坐らせられました。私が上席に坐っておりましたので、戸田仙太郎先生（当時、武藤外科教室、そののち泌尿器科教授、現在名誉教授）から木村忠司先生（京大外科、そののち教授、名誉教授、愛媛大学病院長、現在故人）に間違えられ、いろいろ話かけられて面喰らってしまったことが印象的に強く、今も脳裡に残っております。

筆が前後いたしますが、第1回、第2回までの総会には、すべて世話人・幹事（極く少数）にて事が運ばれ、第3回から評議員が誕生しました。それまでの世話人・幹事の方々によって評議員が挙げられたのですが、私はその名前を掌握していなかったのです。

総会開催月の4～5カ月前から、その名を知らせてほしいと、私宛に河合直次会長からお電話があり、それが数回に及びました。教室の方が千葉からわざわざお訪ねくださいましたが、正式の人名を掴んでいない私には何ともお答えできず、総会の日は迫ってまいりますし、気が気でなく、やむなく私の頭の中で候補者を60～70名あげて、だいたい30名ぐらいと伺っていたので、この中から約30名をお選びください、とお渡しして、ほっとしました。

いよいよ総会の日となり、会場に何うと、私のあげた候補者全員が評議員として発表されておりましたので、びっくりして河合先生にそのことを申し上げますと「いいよ、いいよ、あれでいいんだよ」とおっしゃられ手のほどこしようもなく、冷汗三斗の思いをしたことなど、昨日のように想出されます。

日本胸部外科学会の30周年を迎えられましたことを衷心よりお慶び申し上げます。（南江堂顧問）